

エッセイの手ほどきをしていて、気がついたことがあります。

みなさん、「自分の書いた文章は、だれもが最後まで読んでくれるもの」と思い込んでいらっしゃるんです。この際、はっきり申し上げておきましょう。

あなたがお書きになった文章は、家族や親しい友人ならともかく、赤の他人はほとんど関心がありません。

あなただって、名の知れた作家やエッセイストならいざしらず、ふつうの人が書いた文章にあまり興味をもてないというのが本音ではないでしょうか。人間なんて、そんなものです。

エッセイの三大要素

表現（文章力）は「才能」である。

構成（起承転結）は「努力」である。

内容（ネタ）は「運」である。

起承転結

この座席は 10 人がけです ゆずり合って おかけ下さい
核心部分が「転」

東武鉄道の夜

「たまには電車で遊びにいこう」と、夫と二人で外出した。横浜の中華街で紹興酒を飲みながら昼食をとり、銀座の画廊を見てライオンビアホールで一息ついた。夕食は池袋で鮨をつまみながら日本酒を飲んだ。夫は機嫌よく酔っ払った。帰りの東武東上線の準急電車は混雑していたが、運よく二人とも若い女性を挟んで座る事が出来た。

成増を過ぎた頃、夫が居眠りを始めて隣の女性に寄り掛かりだした。茶髪を堅ロールに巻いてピンクのフリフリドレスを身に着けた女性は、女子高生に人気のブランド、サマンサタバサのバッグを膝に抱え、ド派手にデコッタ携帯電話で盛んにピコピコと遊んでいる。時々、身体の位置をずらして夫の寄り掛かり行為を防御している。

こんな場合、最近の私は、若い美形の若者は大目にみるが、酔っ払いのオヤジだと肘でピシッと押し返す。まだ若い娘さんは遠慮している様に見受けられる。「夫が若い娘さんに迷惑を掛けているな！」と思いながらも、成増から下車駅の志木までは四区間なので、「自立せよ」と夫に目で念力を送りながら、静かに状況を見守っていた。

朝霞台を過ぎた頃、電車が急停車した。踏切に人が立ち入ったと車内放送が流れた。電車はなかなか動かない。しびれを切らした私は、夫の迷惑行為を解消すべく、「席をかわりましょうか？ その酔っ払いはうちの夫ですから」と思い切って声を掛け

た。娘さんは驚いた様に顔をあげた。

真正面から対面して私の方が仰天した。後期高齢者と推察される、かなりのご高齢である。十代の女の子が身に着ける様なお姫様スタイルと、顔とのあまりのギャップに圧倒され、ジリジリと冷や汗が出てきた。

元娘さんは嬉しそうに立ち上がり、「アラ、すみませんネ！」と言って席をかわった。「なんだ、オババだったのか……」。自分の事は棚に上げ、なにやら複雑な思いが頭をよぎった。星の輝く冬空の下、銀河鉄道ならぬ、東武鉄道の夜の出来事である。

筆者はすでにオババであることを承知のうえでエッセイを書いています。この布石は読み手をだます仕掛けともとれるでしょう。実に楽しい仕掛けではありませんか。書いているときの筆者の嬉々とした愉悦の表情が目に浮かぶようです。

作文とエッセイの違い

作文 書き手が主役の世界
エッセイ 読み手が主役の世界

エッセイとは言えば、他人に読んでもらいたいと思って書かれるのがふつうではないでしょうか。読んでもらい、できれば、

「おもしろいね」

と言われたい下心があるのが、大人が書くエッセイではないでしょうか。

読み手を意識して書くのが、エッセイです。自分が書きたいことを書いても、読み手がつまらなければ意味がない。読み手が主役、読み手に満足してもらおう世界なのです。

ドジ話を抵抗なく書ける方は、自己を対象化、客観化できている人が多いようです。自分が人を笑う存在であるだけでなく、自分も人から笑われる存在であることを自覚している。自分を常に突き放して観察することができているんですね。

エッセイの極意（三位一体）

1. 飽くなき好奇心
2. 鋭い観察力
3. 旺盛なユーモア精神

五目ちらしは、ただ無意識にばくばく食べているようにみえて、実はその意識下で細かな

配慮をしながら食べているものなのだ。

たとえば、一口分を箸ですくい取ろうとして、ふと、その近所のシイタケの一片を取り寄せて加え、その一口分の味の濃厚化をはかったりする。上に載りすぎている錦糸卵を少しわきへよけ、具の均質化をはかったりする。

・・・

こうした細々とした点検と配慮と、導入と排除と、再配合と再調整の作業のために、五目ちらしを食べている人は次第に寡黙になっていく。

カニを食べるときの“カニ現象”が、五目ちらしの場合にも起こるのだ。

昼懐石などの店で、おばさんたちの会話があんまりうるさいときには、五目ちらしを出すなんてのは、どうカニ？

『東海林さだおのフルコース』内「五目ちらしの沈黙」

新しく入った塾生には、自分のことにしか興味がない方がいらっしやいます。自分が書いた作品がどう評価されるかには関心があるのですが、ほかの塾生の作品には無関心です。

自己中心的な方が多いようです。他人に興味があつたかと言っていいほどないんですね。こういう方のエッセイは、第二章で説明した「書いて自分だけが満足の世界」にどっぷり浸っております。その世界を少しでも突き崩して、読まれるエッセイを書いてもらうために、こんなアドバイスをしていきます。

意識して他人のことを書きましょう。

なぜ、こんなアドバイスをするかと言えば、こういう方の作品は、他人が描かれていたとしても、まるで置物のような存在なんですね。自分とは違う感受性、価値観をもった一人の人間として他人が描かれていない。自分を脅かす存在、不可解な存在ではないので、こういう方の作品には、他人との間の葛藤や不安、誤解が引き起こすドラマがあまり見当たりません。

読まれるネタの10の発掘法をおさらいしておきましょう。

- ①リアルに書けるネタを探そう。
- ②1番よく知る世界こそ、リアルに書けるネタの宝庫だ。
- ③他人には書けない「日常のドラマ」を思い起こそう。
- ④内容が「深い」話を探そう。
- ⑤自分の得意なネタの脈絡をもっておこう。
- ⑥いいネタは時間を置いて何度でも書き直してみよう。
- ⑦自慢話は読まれない。失敗ネタ、ドジ話ほど読まれることを知ろう。
- ⑧書くことは精神のストリップ。気品を保ち、そして大胆に。
- ⑨プロの「観察力」を見習おう。観察力こそ、ネタを自ら生み出す魔法の箱だ。

⑩他人の言葉に敏感になろう。そして想像力をふくらまそう。

読まれるエッセイを考えるうえで最も大切なのは、自分が得意なネタの鉱脈を二つか三つもつておくことです。その鉱脈を深く掘り下げることが怠らないことです。

改行した目頭に接続詞を使わないよう指導しているのは、「改行」自体に接続詞的ニュアンスが表現されているからです。

・・・接続詞があると意外性が薄れてしまうからではないか。落差が縮む。

次の塾生の作品は、家で寝ていて外の物音に気づく場面から始まります。

朝の気を感じてまどろむどころか、耳に入ってきた音が気になった。

ザザーツと、コンクリートの上に砂利を撒くような音と、カチツという金属音。同時に「何やってるんだよ！」と低いドスのきいた男の声。

聞こえてきたのは道路工事の音ではありません。なんとわが家の庭に咲く大輪の薔薇を、花ばさみでカチツと切って盗もうとし、だれかに注意されて逃げ出した花泥棒の物音でした。音だけで表現することで、緊迫感が出ています。